

*** イメージ画にみる母子関係 その1 ***

ささえる母ともたれる私

やまだようこ

1 母子関係を絵にすると

もし目の前に一枚の白紙を渡されて「幼いときのあなたとお母さんとの関係をイメージして自由に絵に描いてください。」と問いかけられたなら、あなたはどんな絵を描くだろう。

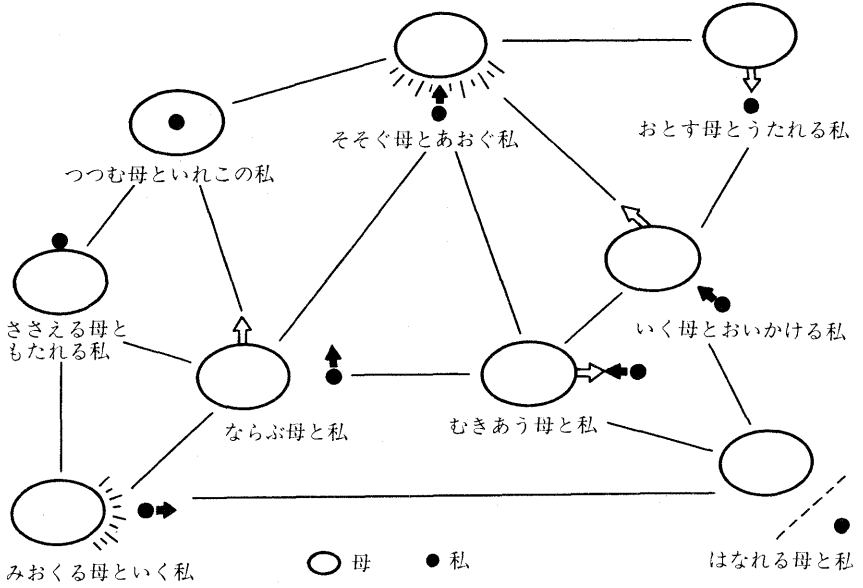
こんな問いを実際に大学生にしてみると、みな最初は「エー」「イヤー」「絵なんてにがてョォー」「そんなの簡単には描けないウァー」としりごみするが、結構楽しそうに描いてくれる。それを共同研究しているアメリカやドイツや中国の心理学者に見せると、「絵は日本の学

生のほうがだんぜんうまい」と悔やしがるから、日本の学生がむだにマンガを読んでいるのではないことが証明されるばかりか、言葉で論理的に説明することががてな日本人も絵による表現には自信をもってよいらしい。

2 母子関係の網目^{ネットワーク}

人の心は実にさまざまなようでも、人が想いつく基本的なイメージには、あんがい共通した「かたち」がある。絵は、複雑でとらえどころのない「母子関係」のありようを、まるごと単純な一枚の構図に縮約してとらえ

図1 ^{ネットワーク}さまざまな母子関係の網目



▲
 やまだようこ『私をつつむ母なるもの』
 ——イメージ画にみる日本文化の心理——
 有斐閣より

ることができるすぐれた意味記号である。

この研究は、母親像と自己像をひとまとめにして関係概念としてとらえるところに特徴がある。その基本の私たちはさらに、約千五百人の女子大学生の絵から、図1のように関係づけられ、網目ネットワークモデルとしてまとめられた。そのうち「包む母と入れ子の私」のかたちは、日本文化の基本構図としても興味深いものだが、それについてはすでに著書『私をつつむ母なるもの——イメージ画にみる日本文化の心理』（有斐閣）で説明した。このシリーズではそれ以外のさまざまな母子関係の構図を眺めていくことにしたい。

ただし「どのような母子関係が良いか」という価値判断や教育評価からはできるだけ離れて見ていくことにする。人間関係には、こうすればよいという一律な公式はあてはまらない。長所と短所は裏表であり、同じ関係が「良く」も「悪く」も働くからである。母子関係には、それぞれ違ういろいろなかたちがあってよいし、一人の人が多様な「母」の機能をもつこともできるのである。

これらの絵は、単なる母子関係の問題をはるかに超えて、原理的な二者関係「人と人とをむすぶかたち」を表わす意味記号として眺めることができるし、人が外界や他者とどのような関係を結んで生きるのかを考える上にも役だつてであろう。（図1参照）

3 大地としての母——下から支える

最初に「ささえる母ともたれる私」の構図をとりあげてみよう。これは、母が私を「支えている」、そして私が母に「もたれている」「頼っている」「依存している」「くっついている」という関係が描かれた構図である。

母が私を支えるやりかたの一つは、図2の「親ガメの上の子ガメ」や「鏡もち」のように「下から支える」方法である。

ある学生は「大地としての母」を描いて次のように説明していた。「かよわい花が一輪咲いていても大地からそれを支えていてくれる感じをあらわしたかった。母が怒れば、地震のようにユラユラと大地は揺れるが、激し

い雨がとっても、しっかりと根を支えてくれるのである。小さい時、私は病気で長い間寝ていたので、余計守っていてくれるというイメージが強い。」

別の学生は「土台としての母」を描いて次のように説明していた。「茎、葉、根のいわば花の土台みたいになるものが母親で、根から養分を吸い取ってもらい、茎で

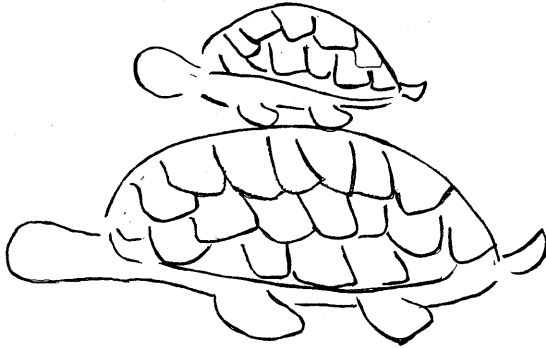


図2 親ガメの上の子ガメ

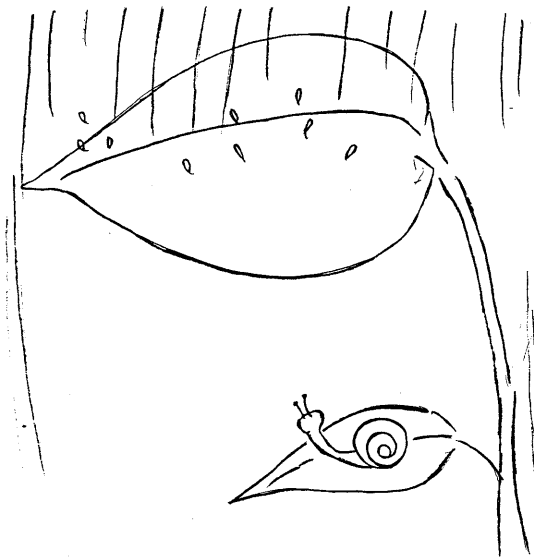


図3 傘となる母

送ってもらって咲く花が自分であるとイメージしました。幼いときは母親の手助けのもとに物事をかたづけしてきたのだと思います。幼いなりに自分でいろいろなことを考え、行動してきましたとは思いますが、その一つ一つのしぐさ、行動、言語というのは母親が教えたものであり、教えられなくても自分で見てまねをしてきたものだ

と思います。母は自分より絶対に強い人、自分にとってなくてはならない人と思います。」

これらは文字どおりグラウンド（ground）大地、基礎、土台、背景）としての母の姿である。母は、子よりも圧倒的に大きく強く安定しているが、子を威圧するのではなく、「下積み」「縁の下の力持ち」「踏み台」「滋養の基」となって子の成長のために献身的にサポートする存在として描かれている。（図2・図3参照）

4 傘となる母——上から支える

第2の母の姿は、図3の「傘となって風雨から守ってくれる母」や「屋根になる母」のように、私を「上から支える」母である。

これらの絵では、「小さいころ母は私を身体中がかばい育ててくれました」「母の大きな傘によって外界のいろいろな危険物をふせいでもらっていた私」「知らず知らずに見守っていてくれた母親、『母親』の存在を私自身自覚していないけれど、いつも大きなものが自分をと

りまいていたような気がする」などと説明されているように、自分より大きい母が我が身をもって子の成長にさげるといふ点では「大地としての母」と同じである。しかし土台として「支える」というよりは、「かばう」「おおう」「包む」「守る」という機能のほうがより強められた姿である。

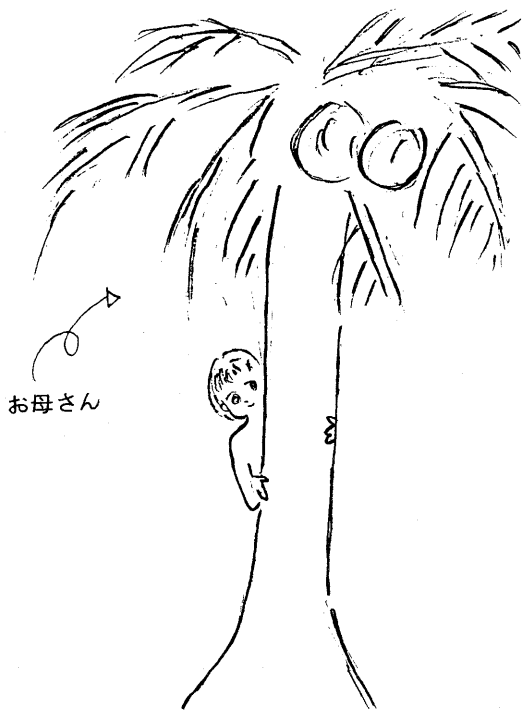
5 盾となる母——前から支える

第3の母の姿は、図4の「木の後ろに隠れる私」や、「母のスカートの陰に隠れる私」「いじめっ子を追い払ってくれる母」のように、私を「前から支える」母である。

ある学生は、巣を襲う巨大なヘビに立ち向かって羽を広げて闘う親鳥としての母と、その後ろの巣の中で震えているヒナの絵を描き、「親は命をかけて子を守る」と説明していた。前から支える母は、子を後ろに隠し敵や外界を前面で防ぐ盾となる母である。

「母に背負われる私」の絵もよく見られた。これは

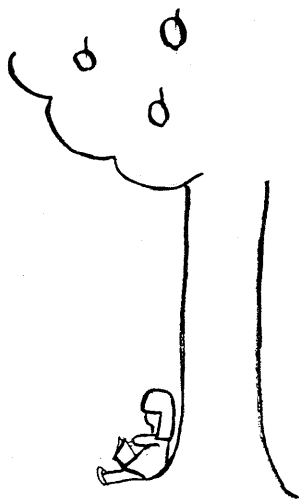
「前から支える母」も「下から支える母」の折衷形でもあり、親ガメの上の子ガメのように母の背中にのって運ばれる自分と、いざという時には母の後ろに隠れて安心



頼っていた

▲図4 木(母)の後に隠れる私

していられる自分の姿である。
日本の伝統的な「おんぶ」は、抱く姿勢に比べると、母の手足の自由や行動力が確保されやすく、母と子が同



いれば安心できた

◀図5 木(母)にもたれる私

じ方向を向いて行動を共にしやすいこと、母が前面に出て「盾」の機能をもちやすいこと、しかも母にぴったりと全身がくっつきやすいことなどから、子どもには「大船」にのったみたいで安心できる心地よさがある。(図4・図5参照)

5 後ろだてとなる母——後ろから支える

第4の母の姿は、図5の「大木にもたれる私」のように「後ろから支える」母である。これは、子どもが安心してもたれたり頼ることができる、依りかかりの支柱や

パトロンとしての母、あるいはバックグラウンドとしての母である。

以上のように支えかたは微妙にちがうものの、いずれも「ささえる母ともたれる私」にあてはまる母子関係のかたちについて概観してみた。この次には、これが他のかたちとどのように関係しむすばれていくのかというところへ考えをすすめていきたい。

(愛知淑徳大学)

